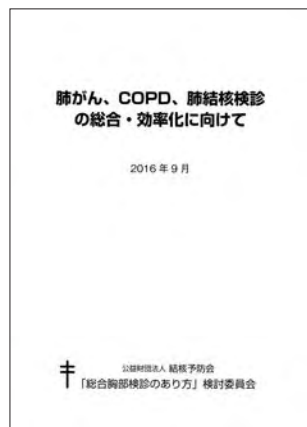


# 「総合胸部検診のあり方」検討委員会 報告書の刊行に際して

結核予防会

専務理事 竹下 隆夫



「総合胸部検診のあり方」検討委員会報告書

肺は、脊椎動物では呼吸、無脊椎動物でもガス交換を行う機能の臓器である。そして、「肺腑を衝く」とか「肺腑を抉る」という言葉があるが、肺腑とは心の奥底、心底、転じて急所を意味し、活力の根源である魂（たましい）を意味する「魄」を宿すとも言われている。こうしたことから古来「落魄」という表現が用いられて、肺が充実していないと悲しみやすく心配性になるとされているように、肺は生命の維持とともに活力の陰陽をも象徴する極めて重要な臓器であると言える。

さて、こうした重要な臓器である肺の検診のあり方について、平成27年5月から6回にわたる標記委員会での議論を経て、このたび報告書『肺がん、COPD、肺結核検診の総合・効率化に向けて』が刊行された。

わが国の胸部検診の嚆矢は、言うまでもなく胸部エックス線写真撮影法の開発をうけて本格的に始まった結核検診であり、既に80年に及ぶ歴史を有している。明治時代から昭和30年代にかけて「国民病」と恐れられた結核が、いわば胸部エックス線間接撮影と全国津々浦々を巡回したエックス線検診車の普及等による早期発見、公的負担による早期治療、そしてBCG接種による予防の徹底という国を挙げての対策に努めた結果減少していくと、胸部検診の中心は高齢化社会の進展に伴う肺がんの早期発見に活かされるようになる。

この間、胸部エックス線撮影法は精度管理の向上とともに数々の技術的進歩を遂げていく。また、他方で

低線量CTの開発やCT検診車の導入によって、肺がん発見率は大幅に向上していく。肺がんは現在、部位別死亡率において男性で第1位、女性では第2位を占め、いずれも近年増加傾向にあるが、男性の比率が高いのは喫煙率の高さに比例している。

そして、2030年までに世界の死因の第3位になるであろうとWHOが予測しているCOPD(慢性閉塞性肺疾患)もまた喫煙による気道や肺胞の炎症で生じ、肺の働きが低下する病であるが、わが国では2013年にスタートした「健康日本21(第2次)」において対策を要する主要な生活習慣病として新たな胸部検診の対象に位置づけられた。このCOPDに関して結核予防会では2006年から本支部間の共同研究としての取り組みを開始し、実態調査と質問表・スパイロメトリーを用いたCOPD検診の有用性等の検討を行ってきた。加えて、千葉県支部においては、スパイロメトリーによるCOPD検診を低線量肺がんCT検診のスクリーニングとして位置づける方法によって、既に一定の成果を上げている。

このような中で、「総合胸部検診のあり方」検討委員会では、胸部エックス線検診、低線量肺がんCT検診、スパイロメトリーを用いたCOPD検診をどのように結び付けて総合胸部検診としてシステム化するか審議を重ねた。本報告書はその成果であり、多くの方々、とりわけ全国の保健所や国保連合会の皆様にご高読いただければ幸いである。🐦

